

## #008 お天気雑記帳

## 関ヶ原

司馬遼太郎は、天気に対して独特のこだわりがありました。ある対談で、信長と秀吉が出会うシーンの天気に関する細かい描写についてたずねられたとき、「史料を調べるのに、1年かかりました」「その日晴れていたか曇っていたかで信長と秀吉の出会いの雰囲気は大きく変わってしまう」と答えた、という逸話があります。

司馬遼太郎の小説『関ヶ原』に、霧の描写があります。はたして、これらの霧の描写は本当なのでしょうか？

濃霧が、二十万人の目から視界を奪い去っている。この霧では動きようもなく、敵味方とも一発の銃弾も発せず、霧のうすらぐのを待ちつづけていた。

雨があがり、風が出てきた。その風が、戦場に変化をあたえた。霧がながれはじめ、しだいに双方の人馬、旌旗のむれが見えてきたのである。

霧は、雲が地表に接し、視界が妨げられる現象で、気象用語では視程が1km未満を「霧」、1km以上を「もや」と呼び分けています。霧は、発生原因によって、いくつかの種類に分けられます。ただ、複数の原因が重なって発生することもあり、明確に区別することができないこともあります。

〈放射霧〉地表が放射冷却によって冷え、地上付近にある空気の温度が下がって発生する霧。春や秋の、風が弱い快晴の日の夜や早朝に発生しやすく、冷気が溜まりやすい盆地や低地でよく見られる。

〈移流霧〉暖かい空気が冷たい場所へ移動し、冷やされてできる霧。

〈蒸気霧〉露天風呂で湯煙が立ちのぼるように、水面付近の暖かく湿った空気が周囲の冷たい空気と混合して発生する霧。

〈前線霧〉前線の付近で、暖かく湿った空気が冷たい空気と接触、混合してできる霧。弱い雨が降っているときに発生する霧が代表的。

〈上昇霧〉山腹に沿って空気が上昇するときに、気温が下がり発生する霧。

関ヶ原の戦いがあったのは慶長5年(1600)9月15日、現在の暦に直すと10月21日になります。温暖化が進んだ現在は紅葉にはまだ早いのですが、当時の紅葉は半月から一月ほど早かったため、葉を落とした木々も目立ちは



関ヶ原戦陣図屏風(福岡市博物館)

はじめたころだったと思われます。戦いの前日に雨が降り、当日に霧がかかっていたとしたら、肌寒い、殺伐とした風景だったに違いありません。

東軍の史料『<sup>いたざかぼくさい</sup>板坂ト斎覚書』に、「雨降り山間なれば霧深くして十四五間先は見えず霧あがれば百間も五十間計先も僅に見ゆるかと思えば其儘霧掛りて敵の旗少計見ゆる事も有るかと思えば其儘見えす……鐵砲の鳴る音は霧の内にて夥し(雨が降り、山中なので濃い霧がかかり約25m先までしか見えす、霧がはれ180m・90mほど先がわずかに見えてもまた霧がかかる、敵の旗が少し見えることもあるがまた見えなくなる、といった様子であった……霧の中からさかんに鉄砲の音がして)」とあり、先陣で戦いが始まったものの、家康のいた本陣は霧のために動きがとれなかったようです。放射霧・前線霧に上昇霧が混ざった霧だったと思われます。上昇霧は濃淡があり、また、他の場所で発生した霧が流れてきたり、雲が低く垂れこめることもあります。

西軍の史料『<sup>きつかわひるいえ</sup>吉川廣家自筆覚書案』に「其當日霧ふかく候て、五間十間相隔候所會見え不申候、又は高山にて候故、山下行之趣、一圓見え不申躰に候(その日は霧が深く、約9~18m離れたところも見えなかった。しかも高い山に陣取っていたので、山の下の様子が分からなかった)」とあります。

この『<sup>あんごくじ えいけい</sup>吉川廣家自筆覚書案』に、西軍を主導的にまとめていた安国寺惠瓊や五奉行の一人で戦いの後に自刃した<sup>なつかまさいえ</sup>長束正家などが出陣しなかったことも書かれています。なりゆきで戦いに加わり、態度を決めかねていた西軍の武将も多かったと思われますが、戦うつもりで山頂に陣取っていた<sup>おたによしつぐ</sup>武将たちも霧のために出陣の機会を逸し、その間に石田光成や大谷吉継の本陣が攻められて劣勢になり、その姿を見て逃げ出す武将や、東軍に寝返る武将も出てきた、というのが真相かもしれません。

気象予報士(株)富士ピー・エス顧問 松嶋 憲昭